

# 15－18か月児の母親による子どもへの感情語入力

教育心理学コース  
同上

浜 名 真 以  
針 生 悦 子

Mothers' Use of Emotion Words in Speech Input to Their 15- to 18-month-old Children

Mai HAMANA, Etsuko HARYU

Young children apply some emotion words to too wide range of situations or facial expressions, and use other emotion words too narrowly. To explore whether the way in which children overextend/underextend emotion words is influenced by mothers' use of those words, the present study analyzed mothers' talk to their 15- to 18-month-old children. Mothers were asked to explain to their children the feelings of the character in stories or those of the model with particular facial expressions. The results indicated that mothers' use of emotion words is partly related to children's application pattern of those words.

## 目 次

- 1 問題と目的
- 2 方法
  - A 実験参加者
  - B 刺激
  - C 手続き
- 3 結果
  - A 母親の刺激の感情の解釈
  - B 刺激ごとの感情語発話
  - C 感情語ごとの発話タイプ分類
- 4 考察
  - A 刺激ごとの感情語発話
  - B 感情語ごとの発話タイプ分類
  - C 課題と展望

引用文献

付記

## 1 問題と目的

感情語は、「見る」、「聞く」といった知覚を表す語や、「知る」「わかる」といった認知を表す語などともに内的状態語の1つとして検討されてきている。この感情語に、「嬉しい」、「悲しい」といった感情状態を表す語の他に「笑う」、「泣く」といった感情表出語を含めるかどうかは研究によって一貫していないが、必ずしも感情表出語の方が感情状態語より先に獲得されるわけではないことがわかっている<sup>1)</sup>。

子どもは20か月前後に感情語を使い始めるが<sup>2)</sup>、使

い始めた段階で大人のような意味で捉えているわけではなく、使用するうちに徐々に語の意味範囲を変化させる。浜名・針生(2015)<sup>3)</sup>は、幼児に対し、喜び、怒り、嫌悪、驚き、悲しみ、恐怖の6感情を生起するような状況と表情写真にそれぞれ感情語をラベルづけさせる課題を行った。それぞれストーリー条件、表情写真条件と呼ぶ。結果、ストーリー条件においては2歳児クラスではどの状況に対しても無回答反応が多いが、3歳児クラスになると、「嬉しい」は喜び状況、「悲しい」は悲しみ状況、「怖い」は恐怖状況のみで最多反応となっており、早期から適切に使用している感情語と考えられる。「いや・やだ」という感情語は嫌悪状況の最多反応であると同時に怒り、驚き状況の最多反応でもあり、子どもはこの感情語の意味を嫌悪状況に限定せず広く捉えていると考えられる。「怒る」「びっくり」はいずれの刺激においても最多反応となっていなかった。一方、表情写真条件では2歳児クラスから感情語によるラベルづけが見られた。2歳児クラスの子どもの喜び表情への最多反応は「笑う」と無回答で、3歳児クラスでは「嬉しい」であった。驚き表情は2歳児クラスから呼び分けられており、3歳児クラスでは「びっくり」が最多反応であった。この2つの表情については一貫して他の表情と呼び分けられていたが、他のネガティブ表情は発達につれて呼び分けが変化していた。このような幼児期の子どもの感情語ラベルづけの特徴に影響するものとして、本研究では母親の言語入力に注目する。

母親の言語入力の量は子どもの語彙量の重要な決定

因であり、たくさんの言葉を聞いた子どもは後に語彙量が多くなることが知られている。自然場面でのインタラクションの中で母親が様々な語を子どもに対して発話することは、14か月から26か月の間の語彙の増加率と強く関連し<sup>4)</sup>、18-29か月児の母親の発話の量、語の種類な豊富さ、文法の複雑さが子どもの語彙量と関連することがわかっている<sup>5)</sup>。スペイン語話者では、18か月時点で母親からたくさんの言語入力を受けた子どもほど24か月時点での語彙量が多く、聞いた単語を認識しその単語に対応する絵を見るまでのスピードが速いことが示されている<sup>6)</sup>。

また、入力される言葉の量や種類の豊かさ、文法の複雑さだけでなく、質の高さも子どもの語彙発達に影響を与えることがわかっている。Cartmill et al. (2013)<sup>7)</sup>は、14か月、18か月時点での母親からの言語入力における指示対象の明確さが、言語入力の量とは独立に54か月時点での子どもの語彙量と関連することを明らかにしている。ここでの指示対象の明確さとは、指示対象が見えるかどうかや母親が指示対象を見ながら話しているかどうかによる。

母親の内的状態語や感情語の使用に注目した研究もなされている。そもそも母親の感情についての言及は個人差が大きく、36か月児の母親では自然場面において1時間に1度も言及しない母親がいる一方で、1時間に21.5回言及する母親もいる<sup>8)</sup>。このような、母親の個人差と子どもの内的状態語や感情語の使用の関連についても検討されており、園田・無藤 (1996)<sup>9)</sup>は、母親で内的状態に言及しやすい母親の子である2-3歳児は内的状態、特に感情状態に言及しやすいという関係を示している。Dunn, Bretherton, & Munn (1987)<sup>10)</sup>は自然場面における18か月時の母親や兄弟の感情状態への言及は24か月時の子ども自身の感情語の発話頻度に関連することを明らかにしている。さらに、36か月時点の母親と兄弟による感情状態への言及が6歳時点での子どもの感情理解課題成績と関連し<sup>11)</sup>、33か月時点の母子感情会話のうち特に原因についての会話が40か月時点の子どもの感情理解に関連することも明らかとなっている<sup>12)</sup>。また、家と人形のおもちゃを使った母子でお話を作る課題上での4, 6歳児の母親の感情語の使用も子どもの感情理解を予測することがわかっている<sup>13)</sup>。このように、感情について豊富に言語入力を受けることで子どもの感情語彙や感情に関する能力が豊かになることがわかってきた。一方で母親による3歳児に対する自分や子ども、他者についての感情状態の言及と、同時点での子

どもの感情理解、信念理解には関連がみられなかったという研究もあり、この結果の不一致については、母親からの言語入力による子どもへの影響が時間を経て現れる可能性や、文化差、きょうだいからの言語入力の効果である可能性が指摘されている<sup>14)</sup>。

感情的な絵本読み場面における母親の言語入力を扱った研究では、15か月時点で母親が子どもの欲求に言及するほど24か月時点の子どもの内的状態語彙や感情に関する能力が高く<sup>15)</sup>、24か月時点で母親が他者の思考や知識に言及するほど33か月時点の子どもの内的状態語彙が多いことが明らかとなっているものの、母親の感情に関する言及と子どもの語彙や能力との関連が見られなかった<sup>16)</sup>。このように感情的な状況を説明させる限定された実験場面では、刺激の感情情報への注目が前提となっており、自然場面に比べて感情語の発話量に個人差が生じにくかったために子どもの語彙や能力との関連が見出せなかった可能性が考えられる。

語彙獲得には入力の量のみならず質が影響するように、感情語の獲得においても母親から入力や母子での会話の量だけでなく、どのように感情語が導入されるかも影響を及ぼすことがわかっている。Fletcher & Reese (2005)<sup>17)</sup>のメタ分析によれば18か月以下の子どもの持つ母親は絵についてラベルづけしたり、コメントしたりすることが多く、18か月より月齢の高い子どもを持つ母親は18か月以下の子どもの持つ母親に比べて子どもに質問をしたり会話を広げたりするというように、18か月頃に言語入力の内容が変化する。このような母親による子どもから感情語を引き出すような話しかけが子どもの感情理解や向社会行動と関連すると言われる<sup>18)19)20)</sup>。これに加え、感情語の使用の正確さも子どもの感情語獲得やその他の能力の発達と関連すると考えられる。Denham, Cook, & Zoller (1992)<sup>21)</sup>は、母親と33-56か月児が乳児の感情表出写真を見ながら会話する際の母子の感情語や表出語の正確な使用と子どもの表情への感情語ラベルづけ課題の成績が関連することを明らかにした。ここでの正確な使用とは、呈示された写真ごとに、使用された感情語が正確かどうかを評定者が点数化するものである。

しかし、正確な言語入力とは、語と対象が相互に限定的に対応づけられることであろう。つまり、対象に適切な語のみが使われることだけでなく、特定の語が適切な対象のみに限定して使われるということにも注目する必要があると考えられる。例えば母親が「悲しい」という感情語を悲しみ刺激のみに特定の使って

いれば子どもはその語の意味を捉えやすいが、様々な刺激に対して使っているとすれば、子どもはその語の指す意味範囲が広いものとして受け止めることになるだろう。同様に子どもが、悲しみ表情に「悲しい」とラベルづけできていたとしても、同時に怒り表情にも「悲しい」とラベルづけしているとしたら、それは悲しみを理解しているとは言えないという指摘もある<sup>22)23)</sup>。

以上に概観してきたことから、母親の感情語入力力の個人差が子どもの語彙や感情的な能力に関連することが多くの研究で示されているが、母親による感情語入力力の正確さについては検討が不十分であると言える。そこで本研究では、母親による主体的なラベルづけやコメントが多い、子どもの感情語発話前の時期である15-18か月児の母親を対象に、母親の感情語入力の特徴を明らかにし、幼児期の感情語獲得との関連について考察する。

状況と表情は共に他者の感情を推測する手がかりとして機能するが、表情が表す感情は一意に決まる一方で状況は感情を読み取る者の解釈次第で推測される感情が異なるという特徴を持つことから、状況への感情語ラベルづけと表情への感情語ラベルづけを区別して検討することが必要と考えられる。そのため、感情を生起するような状況を表すストーリー刺激と、表情写真刺激を用いて母親の感情語入力を収集する。

また、子どもは「泣く」という言葉を苦悩の意味で使用することもあるため<sup>24)</sup>、感情語には、「嬉しい」、「悲しい」といった感情状態語だけでなく「笑う」、「泣く」といった感情表出語も含めることとする。

## 2 方法

### A 実験参加者

15-18か月児38名（男子17名、女子21名）の母親を対象とした。参加者のうち18名（男児の母親9名、女児の母親9名）に対して確認したところ、母親の平均年齢は34歳（標準偏差：4.53、レンジ：26歳～40歳）であった。

### B 刺激

ストーリー条件では、男の子のキャラクターを主人公にした刺激と女の子のキャラクターを主人公にした刺激を用意し、子どもの性別に合わせて使用した。喜び、怒り、嫌悪、驚き、悲しみ、恐怖の6感情を生起するような感情的状況を描いたストーリーであり、2コマ分のイラストとその場面を説明する文と主人公の

気持ちを尋ねる文がそれぞれ1枚の紙に印刷された。2コマ目では主人公が正面を向き、各感情に対応する表情を表出していた。倫理的配慮から呈示順の最後には必ず2つ目の喜び刺激を用い、それ以外のストーリーの呈示順はランダムとした。2つ目の喜び刺激は分析に含めないこととした。

表情写真条件では、浜名・針生（2015）<sup>25)</sup> で用いられた表情写真刺激を使用した。Ekman & Friesen（1975 工藤訳編 1987）<sup>26)</sup> の基準に従った女性の表情写真であり、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐怖、嫌悪の6感情それぞれ1枚ずつ、10cm×10cmのカードに背景を灰色にして印刷されていた。刺激の呈示順序はランダムであった。

## C 手続き

実験参加者の半数がストーリー条件、表情写真条件の順、残りの半数が表情写真条件、ストーリー条件の順になるように月齢と性別でカウンターバランスを取って割り当てた。刺激を束ねて1セットとして母親に手渡し、自分の子どもに刺激を見ながら話しかけるよう教示した。いつも絵本を読みながら子どもに話しかけるときのように、またキャラクターもしくはモデルの気持ちに注目して話すよう指示し、母親の発話をビデオカメラで撮影した。

両条件が終わった後、母親が各刺激においてキャラクターやモデルがどのような感情を生起したと解釈していたかを確認するため、母親への質問紙調査を行った。子どもに説明した感情や子どもに用いた言葉とは必ずしも同じ表現でなくても良いことを説明し、大人として主人公やモデルがどんな気持ちだと思うかを自由記述と6感情からの強制選択の2通りで回答させた。分析には後者のみを用いた。

## 3 結果

### A 母親の刺激の感情の解釈

刺激ごとに発話せずにページをめくってしまった場合や中断して発話が取れなかった者を除外した上で、質問紙調査で実験者の意図通りの感情を選択した母親を正答者とした割合をTable 1, 2に示す。全刺激について実験者の意図通りの感情を回答した、ストーリー条件28名、表情写真条件22名の母親を分析の対象とした。表情写真刺激の恐怖は正答者の割合が低く妥当な刺激ではなかったと考え、以降の分析から除外した。

Table 1 ストーリー刺激における母親の正答者の割合

喜び	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	悲しみ
93%	83%	100%	97%	79%	93%

Table 2 表情写真刺激における母親の正答者の割合

喜び	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	悲しみ
100%	83%	79%	100%	28%	69%

## B 刺激ごとの感情語発話

母親の発話した感情語とその感情語を発話した母親の人数をTable 3, 4に示す。ストーリー条件で最も多く発話された感情語は、喜び状況で「嬉しい」、怒り状況で「怒る」というように、刺激の感情によって異なっていた。一方、表情写真条件では、「怒る」が怒り刺激だけでなく嫌悪刺激においても最多反応となっており、それ以外では刺激ごとに異なる感情語が最多反応となっていた。悲しみ刺激では「悲しい」ではなく「困る」が最多反応であった。

刺激ごとに対応する感情語の発話数が異なるのか

を調べるため、刺激ごとに対応する感情語の発話数を従属変数とした1要因の分散分析を行った。対応する感情語とは、悲しみ刺激には「悲しい」、怒り刺激では「怒る」といった感情語で、母親ごとに発話数をカウントした。ストーリー条件では刺激の主効果が有意で( $F(5, 135)=7.30, p<.001$ )、シェフェの多重比較によると、嫌悪、悲しみ、怒り刺激より恐怖刺激で、嫌悪刺激より喜び刺激で発話数が多かった( $ps<.05$ )。表情写真条件では刺激の主効果が有意で( $F(4, 84)=7.96, p<.001$ )、多重比較によると嫌悪、喜び刺激より怒り刺激で、嫌悪刺激より驚き刺激で発話数が多かった( $ps<.05$ )。

## C 感情語ごとの発話タイプ分類

しかし、感情語によっては複数の刺激にわたって使用されており、例えばTable 3からは、「いや・やだ」という感情語は嫌悪刺激の最多反応であるが、怒り、悲しみといった他のネガティブ刺激で使用する母親もいることがわかる。そこで、主要な感情語の使い方を

Table 3 ストーリー条件の刺激ごとの感情語発話と発話した母親の人数(28名中)

	喜び	怒り	嫌悪	驚き	悲しみ	恐怖
感情状態語	嬉しい (21) 良い, いい (5) 喜ぶ (4) 楽しい (2)	怒る (16) いや, やだ (5) 困る (3) 悲しい (1) 怖い (1) かわいそう (1) 悔しい (1)	いや, やだ (11) 変 (1) 嫌い (1) 悲しい (1) 困る (1)	びっくり (21) どうしよう (1) 怖い (1)	悲しい (16) かわいそう (7) さみしい (2) いや, やだ (1) ざんねん (1)	怖い (24) びっくり (5)
感情表出語	笑う (2) ばんざい (3)				泣く (15)	

Table 4 表情写真条件の刺激ごとの感情語発話と発話した母親の人数(22名中)

	喜び	怒り	嫌悪	驚き	悲しみ
感情状態語	嬉しい (8) 楽しい (2) 良い, いい (2)	怒る (16) いや, やだ (3) 困る (2) 怖い (2)	怒る (4) いや, やだ (2) やー (2) 変 (1) 悲しい (1) 疑う (1) 悔しい (1) 困る (1) 怖い (1) 不思議 (1)	びっくり (12) 驚く (4) 悲しい (1)	困る (11) 悲しい (9) さみしい (2) 怒る (2) どうしよう (1)
感情表出語	笑う (10) 笑顔 (1)		笑う (2)		泣く (1)

それぞれ、①対応する刺激のみに限定的に使用する、②対応する刺激と対応しない刺激の両方に使用する、③対応しない刺激のみに使用する、④発話しない、の4つのタイプに分類した。感情語ごとのそれぞれの母親の割合を条件ごとにTable 5, 6に示す。コ克蘭・マンテル・ヘンツェル検定を行ったところ、両条件において感情語の使用タイプの割合が感情語によって異なった ( $M^2(15)=38.24, p<.001$ ;  $M^2(12)=35.16, p<.001$ )。感情語が対応づけられた対象の内訳をFigure 1, 2に示す。

ストーリー条件では、「嬉しい」、「怒る」は対応す

る状況のみに発話されており、「びっくり」は対応する状況のみならず、複数の状況に対して使う母親もいた。「悲しい」、「怖い」も同様だが、複数の状況に使う母親は2名のみであった。「いや・やだ」は、嫌悪状況だけでなく他の状況に対しても使う母親もいることがわかる。表情写真条件では、「嬉しい」、「びっくり」が対応する状況のみに発話されている。「怒る」、「悲しい」、「いや・やだ」は対応する状況のみならず、複数の状況に対して使う母親もいた。表情写真条件では恐怖刺激が妥当な刺激ではなかったため、表情写真条件では「怖い」を分析から除外した。

Table 5 ストーリー条件における感情語の発話タイプの割合

	発話あり			発話なし
	対応する状況のみ	対応する状況と対応しない状況	対応しない状況のみ	
「嬉しい」	75.0%	0.0%	0.0%	25.0%
「怒る」	57.1%	0.0%	0.0%	42.9%
「悲しい」	50.0%	7.1%	0.0%	42.9%
「怖い」	78.6%	7.1%	0.0%	14.3%
「びっくり」	57.1%	17.9%	0.0%	25.0%
「いや・やだ」	32.1%	7.1%	14.3%	46.4%

Table 6 表情写真条件における感情語の発話タイプの割合

	発話あり			発話なし
	対応する表情のみ	対応する表情と対応しない表情	対応しない表情のみ	
「嬉しい」	40.9%	0.0%	0.0%	59.1%
「怒る」	54.5%	18.2%	0.0%	27.3%
「悲しい」	27.3%	9.1%	0.0%	59.1%
「びっくり」	54.5%	0.0%	0.0%	45.5%
「いや・やだ」	9.1%	0.0%	13.6%	77.3%

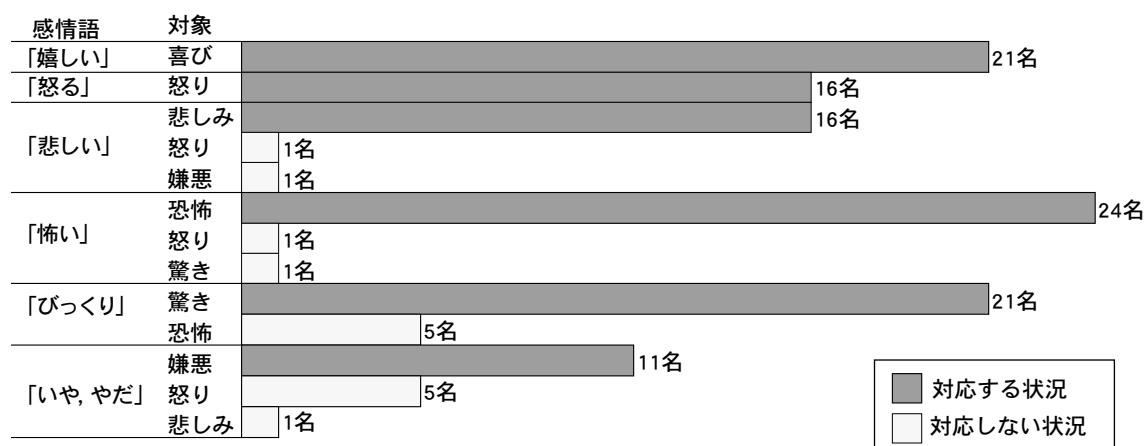


Figure 1 ストーリー条件における感情語を対応づける状況の内訳（28名中）

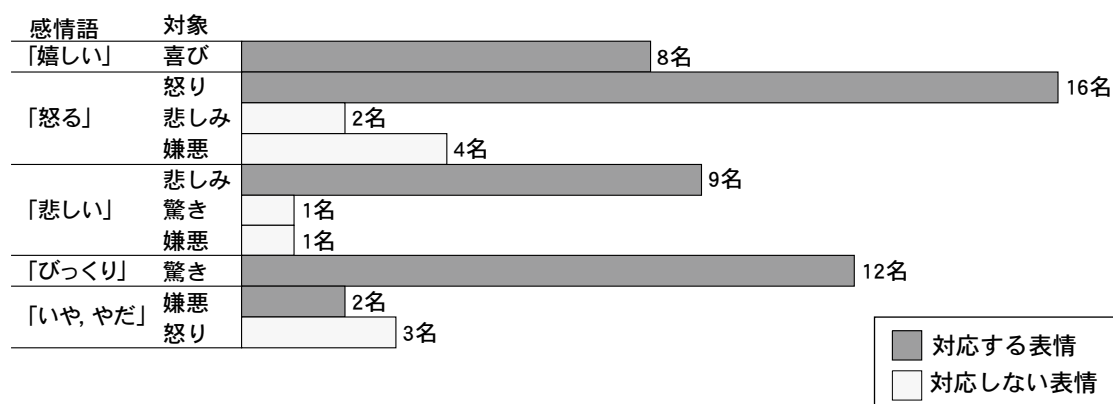


Figure 2 表情写真条件における感情語を対応づける状況の内訳（22名中）

#### 4 考察

##### A 刺激ごとの感情語発話

ストーリー条件では、最も多く発話された感情語は刺激によって異なり、それぞれ刺激に対応する感情語となっていた。一方表情写真条件では、嫌悪刺激や悲しみ刺激での最多反応が異なっていた。最多反応以外には各刺激において対応する感情語以外の感情語の発話が見られた。このように、実験者の意図どおりに刺激の感情を解釈した母親でも、子どもへの入力においては必ずしも対応する感情語を発話しないことがわかった。また、刺激と対応する感情語発話数は刺激によって異なり、ストーリー条件では、恐怖刺激、喜び

刺激、表情写真条件では、怒り刺激、驚き刺激で多く発話されていた。

##### B 感情語ごとの発話タイプ分類

感情語が適切な対象に限定して発話されているのか、広い意味で発話されているのか、異なる対象に使われているのか、そもそも発話されないのかといった、感情語の使い方のタイプに分類した。ストーリー条件では、「嬉しい」、「怒る」を発話した母親についてはそれぞれ喜び、怒り刺激のみ対象に発話するタイプのみであった。「嬉しい」、「怒る」は子どもにとって学習しやすい感情語と言えよう。「びっくり」は、対応する状況だけではなく複数の状況に対して使う母

親もいるが、他の状況のみに使用する母親はいないため、指示範囲が広く解釈される入力、「いや・やだ」は、嫌悪状況だけでなく他の状況に対しても使われる曖昧な入力と考えられる。幼児期の感情語ラベルづけのしやすさと照らし合わせると、「嬉しい」は適切にラベルづけやすく、「いや・やだ」は広い意味で用いられやすいといった対応が見られるものの、他の語については明らかな対応が見られない。一方、表情写真条件は、「嬉しい」、「びっくり」は学習しやすい入力、他のネガティブな感情語は曖昧な入力もしくは指示範囲の広い入力となっており、これは幼児期早期からこれらの語が表情と適切に対応づけられていることに合うと言える。他のネガティブな感情語については指示範囲が広い入力であり、幼児期にも早期から区別できていないことと対応していると考えられる。

このように、ストーリー条件では母親の入力の特徴と幼児期早期の感情語の獲得の特徴の明らかな対応が見られなかったものの、表情写真条件では両者の関連が示唆された。表情への感情語のラベルづけの方がストーリーへのラベルづけよりも早期に発達することを踏まえると、ストーリーへのラベルづけにおいては状況から様々な情報を得て解釈する必要があるため、母親の言語入力以外の要因も影響する可能性が高い。一方、表情へのラベルづけは母親の入力からより直接的に学習できるのかもしれない。

### C 課題と展望

本研究では母親の感情語入力の特徴と、幼児期の感情語獲得の関連について論じた。しかし、言語入力の対象とした月齢15-18か月と、幼児のデータである2歳児、3歳児クラスでは時期が離れているという問題がある。さらに母親と幼児のデータは独立のものであり、母子の関連を個人ごとに見ることはできていない。今後は、縦断研究を通じて、母親の感情語入力と子どもの感情語獲得の関連をより詳細に検証する必要がある。また、実際の母子のやりとり場面では第三者ではなく子ども自身や親自身の感情状態をラベルづけることが多いことから、日常場面での言語入力についても合わせて検討していく必要があるだろう。

また、本研究では、語と対象が相互に限定的に対応づけられている言語入力が子どもにとって語を学習しやすいと考えてきたが、いくつかの対象を類似する概念としまとめて理解できるよう、母親が特定の語を広い意味であえて使用するという方略を取っている可能性もある。このような入力の特徴が、子どもが情動価

や覚醒度の近さを理解することに寄与しているのかもしれない。このような方略の使用を通じた子どもの感情語彙獲得の促進の効果についても検討の余地があるだろう。

### 引用文献

- 1) Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906-921.
- 2) 同上
- 3) 浜名真以・針生悦子. (2015). 幼児期における感情語の意味範囲の発達的变化. *発達心理学研究*, 26, 46-55.
- 4) Huttenlocher, J., Haight, W., Bryk, A., Seltzer, M. & Lyons, T. (1991). Early vocabulary growth: relation to language input and gender. *Developmental Psychology* 27, 236-248.
- 5) Hoff, E. & Naigles, L. (2002). How children use input to acquire a lexicon. *Child Development* 73, 418-433.
- 6) Hurtado, N., Marchman, V. A., & Fernald, A. (2008). Does input influence uptake? Links between maternal talk, processing speed and vocabulary size in Spanish-learning children. *Developmental Science*, 11, F31-F39.
- 7) Cartmill, E. A., Armstrong, B. F., Gleitman, L. R., Goldin-Meadow, S., Medina, T. N., & Trueswell, J. C. (2013). Quality of early parent input predicts child vocabulary 3 years later. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 110, 11278-83.
- 8) Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of others' emotions. *Developmental Psychology*, 27, 448-455.
- 9) 園田菜摘・無藤 隆. (1996). 母子相互作用における内的状態への言及：場面差と母親の個人差. *発達心理学研究*, 7, 159-169.
- 10) Dunn, J., Bretherton, I., & Munn, P. (1987). Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology*, 23, 132-139.
- 11) 8)に同じ
- 12) Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade, L. (1991). Young children's understanding of other people's feeling and beliefs: Individual differences and their antecedents. *Child Development*, 62, 1352-1366.
- 13) Aznar, A., & Tenenbaum, H. R. (2013). Spanish parents' emotion talk and their children's understanding of emotion. *Frontiers in Developmental Psychology*, 24, 670.
- 14) 園田菜摘. (1999). 3歳児の欲求、感情、信念理解：個人差の特徴と母子相互作用との関連. *発達心理学研究*, 10, 177-188.
- 15) Taumoepeau, M. & Ruffman, T. (2006). Mother and infant talk about mental states relates to desire language and emotion understanding. *Child Development*, 77, 465-481.
- 16) Taumoepeau, M. & Ruffman, T. (2008). Stepping stones to others' minds: Maternal talk relates to child mental state language and emotion understanding at 15, 24 and 33 months. *Child Development*, 79, 284-302.
- 17) Fletcher, K. & Reese, E. (2005). Picture book reading with young

- children: a conceptual framework. *Developmental Review*, 25, 64-103.
- 18) Denham, S. A., & Auerbach, S. (1995). Mother-child dialogue about emotions. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 121, 311-338.
- 19) Brownell, C., Svetlova, M., Anderson, R., Nichols, S., & Drummond, J. (2013). Socialization of early prosocial behavior: Parents' talk about emotions is associated with sharing and helping in toddlers. *Infancy*, 18, 91-119.
- 20) Garner, P. W. (2003). Child and family correlates of toddlers' emotional and behavioral responses to a mishap. *Infant Mental Health Journal*, 24, 580-592.
- 21) Denham, S. A., Cook, M., & Zoller, D. (1992). "Baby looks very sad": Implications of conversations about feelings between mother and preschooler. *British Journal of Developmental Psychology*, 10, 301-315.
- 22) Widen, S. C. & Russell, J. A. (2010a). Children's scripts for social emotions: Causes and consequences are more central than are facial expressions. *British Journal of Developmental Psychology*, 28, 565-581.
- 23) Widen, S. C. & Russell, J. A. (2010b). Differentiation in preschoolers' categories for emotion. *Emotion*, 10, 651-661.
- 24) 1)に同じ
- 25) 3)に同じ
- 26) Ekman, P. & Friesen, W. V. (1987). 表情分析入門：表情に隠された意味をさぐる(工藤力訳編). 誠信書房. (Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face.: A guide to recognizing emotions from facial clues*. NJ: Prentice-Hall.)

## 付記

本論文は、東京大学教育学研究科に提出した修士論文の一部に加筆、修正を加えたものです。本研究にご協力いただいたお母様方、子どもたちにこの場を借りて心よりお礼申し上げます。また、研究実施にあたりお世話になりました明石ゆりさん、金重利典さん、山本寿子さん、大竹裕香さんに感謝申し上げます。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号25285183）の助成を受けました。

(指導教員 針生悦子教授)